

## 第六章 薫の物語 薫、断腸の秋の思い

[第一段 女一の宮から妹二の宮への手紙]

その後、姫宮の御方より、二の宮に御消息ありけり(その後、姫宮から女二の宮に御手紙がありました)。御手などの(御筆跡が)、いみじううつくしげなるを見るにも(非常に美しいのを見るにも)、いとうれしく(とても嬉しく)、「かくてこそ(これだから)、とく見るべかりけれ(早く見たかったのだ)」と思す(と薫殿はお思いになります)。

あまたをかしき絵ども多く(いろいろと美しい絵も多く贈られ)、大宮もたてまつらせたまへり(皇后からもお贈り下されました)。大将殿、うちまさりてをかしきども集めて(大将殿はそれ以上に凝った絵を集めて)、参らせたまふ(女宮に差し上げなさいます)。

\*芹川の大將の遠君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に(「芹川物語」の遠君が女一の宮に恋焦がれた秋の夕暮に)、思ひわびて出でて行きたる画、をかしう描きたるを(思い余って会いに出かけて行くところの画を風情良く描いてあるのを)、いとよく思ひ寄せらるかし(薫殿はとてもよく自身に思い重ねさせられるようです)。「かばかり思し靡く人のあらましかば(この画のように姫宮が、私に思いを寄せてくださったなら)」と思ふ身ぞ口惜しき(と思う薫殿は残念です)。\*「せりかはのだいしゃうのとほぎみ」は注に<『芹川物語』の主人公「遠君」(後に大將に昇進する若いころ)が女主人公の「女一宮」に恋慕する秋の夕暮場面。>とある。『芹川物語』は小学館日本古典文学全集に<散逸物語>とあり、新編日本古典文学全集には補注もあったが、中身は不明らしい。

「荻の葉に露吹き結ぶ秋風も、夕べぞわきて身にはしみける」(和歌 52-06)

「荻原を震えて泣かず秋の風」(意訳 52-06)

\*「荻の葉に露吹き結ぶ秋風」とあるのだから、今はもう秋になっているのだろう。と言っても、「蓮の花の盛りに御八講せらる」(五章二段)とあって、蓮の開花は今の暦で7~8月だから、旧暦で6月の多分半ば過ぎだから、数日で7月になる。初秋文月初旬の頃なのだろう。恐らくは「荻の葉に露吹き結ぶ秋風」が『芹川物語』の絵柄なのだろうが、その画自体が無いかわからないのでは確かめようもない。荻の葉自体は大きな笹の葉みたいな感じ。

と書いても添へまほしく思せど(とその画に書き添えたい気もするが)、

「さやうなるつゆばかりのけしきにても漏りたらば(そういう姫宮への恋情が露ほどの様子にでも洩れ出たら)、いとわづらはしげなる世なれば(とても面倒なことになりそうな間柄だから)、はかなきことも(ほんの少しも)、えほのめかし出づまじ(見せられない)。かくよろづに何やかやと(このようにいろいろな人に何かと)、ものを思ひの果ては(恋心を抱くようになってしまったが)、昔の人のものしたまはましかば(故宇治姉君が生きていらっしやれば)、いかにもいかにも他ざまに心分けましや(どうして他の女に関心を持ったろうか)。

時の帝の御女を賜ふとも(ときのみかどのおおんむすめをたまふとも、今上帝が御息女を下さると仰っても)、得たてまつらざらまし(頂き申さなかつたろう)。また、さ思ふ人ありと聞こし召しながらは(また姉姫が存命で、私に最愛の妻があると帝がお聞きであれば)、かかることもなからましを(そういう御話も無かつたろうに)、なほ心憂く(いつまでも忘れられず)、わが心乱りたまひける橋姫かな(私の心を乱しなざる宇治の橋姫であることだ)」

と思ひあまりては(と薫殿は故姉君が思い出されて)、また宮の上にとりかかりて(また妹の二条院の御方に気が向いて)、恋しうもつらくも(恋しくも切なくも)、わりなきことぞ(今さらどうにもならない匂宮に譲り申した事を)、をこがましきまで悔しき(性懲りも無く後悔します)。

これに思ひわびて(対の御方に一頻り思いを寄せた後に)、さしつぎには(引き続いては)、あさましくて亡せにし人の(驚いたことに入水して亡くなった常陸姫の)、いと心幼く(とても純粹で)、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら(思い止まることのなかつた性急さを残念に思うものの)、さすがにいみじとものを、思ひ入りけむほど(そうは言っても常陸姫はとても深刻にものを考え込んで)、わがけしき例ならずと(私が警護を固めた事を不穏な秘密の露見と)、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけむありさまを(自身の浮気の罪を責任に感じて思い込んでいたという様子を)、聞きたまひしも思ひ出でられつつ(右近などから聞き知ったことを思い出しては)、

「重りかなる方ならで(正妻の女二の宮とは別に)、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむ(ただ気楽に気晴らしの話し相手でいてくれたら)、と思ひしには(と思っていたなら)、いとらうたかりし人を(あの女も、本当に可愛い人だったものを)。思ひもていけば(浮気があったと言っても、考えてみれば)、宮をも思ひきこえじ(匂宮を悪いと思ひ申すのは止そう)。女をも憂しと思はじ(女も悪くはない)。ただわがありさまの世づかぬおこたりぞ(すべては私が常陸姫を故姉君の形代と考えて、女本人にきちんと向き合わなかつた所為だ)」

など、眺め入りたまふ時々多かり(などと薫殿は、庭を眺めて物思いに耽りなざる時々が多くありました)。

[第二段 侍従、明石中宮に出仕す]

心のどかに、さまよくおはする人だに(心穏やかに落ち着いていらっしゃる薫大将でさえ)、かかる筋には(こういう男女関係では)、身も苦しきことおのづから混じるを(辛い気持になる事が自然と出てくるが)、宮は(兵部卿宮は)、まして慰めかねつつ(大将以上に嘆きが収まらず)、かの形見に(あの形代の姫に)、飽かぬ悲しさをものたまひ出づべき人さへなきを(いつまでも忘れない悲しさを訴えられる相手さえ居ないのを)、対の御方ばかりこそは、「あはれ」などのたまへど(対の御方だけが義妹の死を痛ましいと仰るものの)、深くも見馴れたまはざりける(深くは見知っていらっしゃらなかつた)、うちつけの睦びなれば(この数年の付き合いなので)、いと深くしも(そんなに親身に詳しくは)、いかでかはあらむ(義妹の人柄を

知ってはいません)。また、思すままに(また匂宮は夫人の御方に思うままに)、「恋しや、いみじや(姫が恋しくてたまらない)」などのたまはむには(などを仰るのは)、かたはらいたければ(さすがに気が引けるので)、かしこにありし侍従をぞ(姫の側近であった侍従君を)、例の(例によって女房に)、迎へさせたまひける(迎え入れなさいました)。

皆人どもは行き散りて(常陸姫の女房たちは皆散り散りに去って)、乳母とこの人二人なむ(乳母とこの右近と侍従の側近二人は)、取り分きて思したりしも忘れがたくて(姫が特に篤く信頼なさっていたので、姫を忘れられずに)、侍従はよそ人なれど(侍従は乳母とその子の右近とは違って、後から仕えた若女房だったものの)、\*なほ語らひてあり経るに(失踪から夏いっぱい尚も、山荘に残って暮らしていたが)、世づかぬ川の音も(田舎風の荒々しい宇治川の水音も)、うれしき瀬もやある(京に目出度く迎えられる日まで)、と頼みしほどこそ慰めけれ(と楽しみにしていたからこそ我慢できたが)、心憂くいみじくもの恐ろしくのみおぼえて(今では嫌な恐ろしい音にばかり思えたので)、京になむ(京に戻って)、あやしき所に(粗末な家に)、このころ来てあたりける(最近来て住んでいたのを)、尋ねたまひて(兵部卿宮は探し出しなさって)、\*「なほ」は<未だに>。姫の失踪は3月末晩春で今は7月中旬の初秋あたりで、夏の三ヶ月が丸々過ぎている。

「かくてさぶらへ(二条院で仕えなさい)」

とのたまへば(と仰ると)、「御心はさるものにて(宮のご親切は有難いが)、人びとの言はむことも(女房たちが言うだろうことに)、さる筋のこと混じりぬるあたりは(宮が姫に言い寄った事も出てきそうな二条院では)、聞きにくきこともあらむ(嫌な思いもしそうだ)」と思へば(と思えば)、うけひききこえず(侍従は引受け申さず)、「後の宮に参らむ(皇后にお仕え申したい)」となむおもむけたれば(とお応え申せば)、

「いとよかなり(それで良いだろう)。さて人知れず思し使はむ(その上でせいぜい目を掛けてやろう)」

とのたまはせけり(と兵部卿宮は仰せになりました)。心細くよるべなきも慰むやとて(これで心細い身寄りのない立場も生計が立ちそうだと)、知るたより求め参りぬ(侍従は知り合いの女房を介して皇后にお仕え申しました)。「きたなげなくてよろしき下臈なり(都会風の気の利いた下級女房だ)」と許して(と皇后の上臈も認めて)、人もそしらず(誰も侍従に辛く当たりません)。大将殿も常に参りたまふを(大将殿も常に皇后の御機嫌伺いに参上するのを)、見るたびごとに(見掛ける度に侍従は)、もののみあはれなり(姫が家を構えていて下さったら、其処では自分が上臈として御側に侍り申したものをと、感慨深く思われます)。

「いとやむごとなきものの姫君のみ(相当な高家の姫君ばかりが)、参り集ひたる宮(女房として参集している皇后社中だ)」と人も言ふを(と世間でも評判だが)、やうやう目とどめて見れど(次第に物慣れてよく見回しても)、「見たてまつりし人に似たるはなかりけり(常陸姫ほどの美しい姫君はいない)」と思ひありく(と侍従は思っていました)。

[第三段 匂宮、宮の君を浮舟によそえて思う]

この春亡せたまひぬる\*式部卿宮の御女を(この春にお亡くなりになった式部卿宮の御息女を)、継母の北の方(継母の後妻が)、ことにあひ思はで(特に折合いが悪く)、\*兄の馬頭に人柄もことなることなき(同腹弟の馬頭で人柄も平凡な男が)、心懸けたるを(この継子に懸想していたのを)、いとほしうなども思ひたらで(宮家の御息女が五位程度の者に嫁ぐのは身分不相応に当たるとも思い至らずに)、さるべきさまになむ契る(その婚儀を取り決めた)、と\*聞こし召すたよりありて(と皇后がお聞き知りあそばして)、 \*「しきぶきやうのみや」は注に<蜻蛉式部卿宮、桐壺帝の皇子、源氏の弟。>とある。この人の死去は常陸姫失踪と時期が重なるらしく、二章四段に「そのころ、式部卿宮と聞こゆるも亡せたまひにければ、御叔父の服にて薄鈍なる」と薫殿の事情が語られ、また五章一段に「後の宮の、御軽服のほどは、なほかくておはします」と皇后が六条院に里下がりして三ヶ月の軽い喪に服していたことが語られていた。ただ式部卿宮は、六条院光君の子である源氏一家にとって叔父に当たるということは、朱雀院の皇子である今上帝にとっても叔父なのであって、皇后だけが里下がりして謹慎する、ということは、如何にも骨休めの方のように見える。ともあれ三ヶ月の服喪であれば、今は夏の三ヶ月も過ぎて秋の七月に入っているようなので、皇后は御所に戻っているのかとも思ったが、姫宮の存在が語られるようなので、此处は六条院春の町の寝殿の皇后の御座所が舞台らしい。 \*「せうとのむまのかみ」は注に<継母の北の方の兄弟。右馬頭、従五位上相当官。>とある。「せうと(兄人)」は<女から見て同服の兄や弟。>と古語辞典にある。此处では恐らく弟なのだろう。また、「むまのかみ」は馬寮(めれう、御所の厩舎)の組織上の責任者で<頭人・長官>だが、実際の厩舎実務は専門の係官が務めるのだろう。で、馬寮も左右の二組織制となっていて、左馬寮(さまれう)と右馬寮(うまれう)があり、左馬寮の長官は左馬頭(さまのかみ)、右馬寮の長官は右馬頭(うまのかみ)と呼ばれたらしい。「むまのかみ」と「うまのかみ」とは紛らわしい。注には<右馬頭>と示してあるが、「右」という根拠はまだ語られていないかと思うので、当面は<馬頭>として置きたい。 \*「聞こし召すたよりありて」は注に<主語は明石中宮。>とある。話題と話し運びと敬語遣いからそう分かる、という事かと思うが、やはり明瞭ではない。

「いとほしう(何ともったいない)。父宮のいみじくかしづきたまひける女君を(故叔父宮が非常に可愛がってお育てなされた姫君を)、\*いたづらなるやうにもてなさむこと(そんな低い身分のものにさせては、張り合いの無いことだ)」 \*「いたづらなるやう」は<無駄にしていまいそう→故宮の御遺志に背く>みたいな言い方なのだろうが、男に真心があれば、殿上人ではあるのだから、その結婚で姫本人は幸せになれるかも知れないが、故宮や実の母(恐らく故人)の人柄を知り、その王家の価値観を敬う明石中宮にしてみれば、あまりにも惜しいと思われたのだろう。女官として御所勤めしていれば帝や東宮のお手付きがあるかもしれない。側室でも、平の官僚家とでは、御所の生活様式の格は段違いに優雅で、体裁では見映えすることこの上ない、というのが光君の力で陰を知らずに御所暮らしをして来た明石中宮の<親切心>なのだろうが、人が何に意味を見出すのかは本人次第だ。

などのたまはせければ(と仰ったので)、いと心細くのみ思ひ嘆きたまふありさまにて(姫本人も、とても先行きを心細くばかり思っただけで悲嘆なされている様子なので)、

「なつかしう(親切に)、かく尋ねのたまはするを(皇后がこう仰っているのだから、宮仕えなさったら)」

など、\*御兄の侍従も言ひて(と姫の實の兄の侍従職を務める者も言つて)、このころ\*迎へ取らせたまひてけり(最近皇后が女房として召抱えなさつていらつしやいました)。\*姫宮の御具にて(姫宮のお遊び相手として)、いとこよなからぬ御ほどの人なれば(まことに申し分ない御身分の人なので)、やむごとなく心ことにてさぶらひたまふ(実に優雅な高貴な作法でお仕え申しなさいます)。\*限りあれば(しかし王家血筋の姫と言つても、女房として出仕するからには、服装や行儀作法に決まりがあるので)、宮の君などうち言ひて(宮の君と名付けられて)、裳ばかりひきかけたまふぞ(唐衣は省くとしても、裳は形だけでも付けていらつしやるのが)、いとあはれなりける(世が世なら御自身がかしづかれる身かと感慨深いものでした)。\*「おおんせうとのじじゅう」は<姫の同腹兄の侍従>なのだろう。侍従は中務省に属する天皇の側仕え職とのことで、蔵人や近衛と職権が重なりそうだ。天皇の家人のように近い蔵人に比して、侍従は近い身内ながら独立した他家の立場を持っていそうな公的な広がりを感じられる。しかし、制度や世情が安定して長期化すると、人は安楽を求めるので、広い人間関係の公的で堅苦しい統治方法よりは、狭い人間関係の私的で馴染んだ指揮系統を多用しがちだ。公的な侍従よりは私的な蔵人が重宝されたのかもしれない。\*「迎へ取らせたまひてけり」は注に<『完訳』は「中宮方で女房として引き取る」と注す。>とある。「迎へ取る」は<呼び寄せて身柄を引受ける→召し抱える>というようなことらしい。「向かふ」のハ行下二段活用の他動詞は<向かわせる→会いに来させる>で、現代語の<招き入れる。お迎える。>という尊敬語ではないようだ。\*「ひめみやのおおんぐ」は注に<女一宮のお相手。>とある。が、「具」は<備えるもの。揃えるもの。付随するもの。>で主に対して<付属する従者>という語意だから、対等なくお相手>ではなく、主の都合に合わせる<お遊び相手>だ。\*「限りあれば～」の文に付いては、注に<『集成』は「(とはいえ)決りがあることなので(女房として出仕したものだから)、宮の君など名付けて、召名(女房としての呼び名)が付く」「裳くらは。唐衣は略している体。主人の前では女房は裳、唐衣着用の正装が決りである」と注す。語り手の同情が移入された叙述。>とある。

\*兵部卿宮(兵部卿でいらつしやる三の宮は)、「この君ばかりや(もう後は、この姫君くらいしかいないだろう)、恋しき人に思ひよそへつべきさましたらむ(入水した恋しい女に似ているだろうと期待できるのは)。\*父親王は兄弟ぞかし(父君の故式部卿皇子は、常陸姫の父宮と同腹の御弟宮なのだから)」など、例の御心は(などと例の嘆き悲しむ御心は)、人を恋ひたまふにつけても(故人を慕いなさるようでも)、人ゆかしき御癖やまで(女好きの御性分は止まずに)、いつしかと御心かけたまひてけり(早く式部卿宮女に会いたいと気に掛けていらつしやいました)。\*「ひやうぶきやうのみや」と本文で呼称されると妙に事改まった言い方に聞こえる。以下にも、薫殿を「大将」、源氏大臣を「左大臣殿」と役職名で呼称している。が、これは公的な場面という訳ではないので、女房語りとしては、むしろ突き放した言い方で、表向きには身分の高い善い大人が、みたいなカラカイ口調なのだろう。\*「ちちみこははらからぞかし」の「はらから」は同腹兄弟という意味なのだろう。でなければ、御女の父君の故式部卿宮の父宮は匂宮の祖父の光君の父宮と同じ桐壺帝なのだから、匂宮にとって御女は新味の薄い縁故だ。

\*大将(右大将の薫源氏は)、「\*もどかしきまでもあるわざかな(何とかならないかと惜しまれる話だ)。昨日今日といふばかり(ついこの前まで)、春宮にやなど思し(東宮に入内させようかとお思いになり)、\*我にもけしきばませたまひきかし(私にも御意向をお見せになってもいたと言うのに)。かくはかなき世の衰へを見るには(このように呆気なく凋落する目に遭えば)、水の底に身を沈めても(それこそ常陸姫のように入水したとしても)、\*もどかしからぬわざにこそ(変じゃないくらいだ)」など思ひつつ(とあって)、\*人よりは心寄せきこえたまへり(匂宮よりは式部卿御女に同情申しいらっしやったのです)。\*「だいしゃう」という呼称も珍しい。地文で「殿」を付けないのは、王家目線での語りでなければ、この人に寄り添って、この人の目線での語りである事を示し、このように主要人物を列挙して語る場合にこの人に寄り添うということは、この人がこの物語の主人公である事を示す意味合いもあるのだろう。ただし、此处での列挙の視点は女房からして、式部卿宮女の宮仕えに対する男たちの興味を引いた立場で観察する、という冷めたものではある。\*「もどかし」は古語辞典に<「もどく(=非難する)」の形容詞化>とあり、原義の語用は<非難されそうだ>で、転じて現代語に繋がる<思うようにならずまどろっこしい>という言い方になるようで、此处では後者の語用だ。\*「我にもけしきばませたまひきかし」は注に<主語は蜻蛉式部卿宮。「東屋」巻に語られている。>とある。東屋巻二章一段に常陸守夫人の言葉として、「あな、恐ろしや(また凄いことを)。人の言ふを聞けば(人の話では)、年ごろ(大将殿は年来)、おぼろけならむ人をば見じとのたまひて(並大抵の相手では結婚しないと仰って)、右の大殿(源右大臣や)、按察使大納言(藤原大納言)、式部卿宮などの(式部卿宮などの親戚高家が)、いとねむごろにほめかしたまひけれど(とても熱心に婿に迎えようと仄めかしなされたが)、聞き過ぐして(大将殿はそれらを聞き流して)、帝の御かしづき女を得たまへる君は(帝の御秘蔵の内親王を得なされた、というほどの人が)、いかばかりの人かまめやかには思さむ(どれほど女を本気で愛しなされるでしょう)」、と薫殿の婚意を疑っていた。\*「もどかし」は此处では<非難されそうだ→変だ>。\*「人よりは」の「人」は<匂宮>で、これは女房の冷笑口調なのだろう。匂宮は式部卿女が自分の期待通りの女か如何かに興味があり、薫殿はその女の悲しい運命に共感したがっているようだが、結局は二人共に自分自身が夢中になれる女を求めているだけだ、と言っているのだろう。いや、男も女もそれが今を生きる真っ当な生き方だ。

\*この院におはしますをば(皇后が軽服を過ぎても依然として里下がりしていらっしやるということから)、内裏よりも広くおもしろく住みよきものにして(社中の女房連中は六条院春の町が御所よりも広く興趣のある住み心地の良い所なので)、常にしもさぶらはぬどもも(御所には常日頃は参上申さない女房も)、皆うちとけ住みつつ(皆和やかに住み暮らして)、はるばると多かる対ども(いくつも続く対屋の)、廊、渡殿に満ちたり(庭前の渡り橋や奥の渡り廊下に大勢姿を見せていました)。\*「この院におはしますをば」は注に<明石中宮が軽服のため六条院に里下りしている。>とある。軽服の三ヶ月は過ぎているだろうに、依然として六条院に留まっている、という事かと思う。その意外性が「を」を「をば」と強調する理由であり、この「を(ば)」は上句を<~(ということ)によって>という条件項に成す接続助詞語用なのだろう。

\*左大臣殿(六条院全体を経営なさる源氏左大臣殿は)、\*昔の御けはひにも劣らず(故光君の御威勢にも引けを取らず)、すべて限りもなく営み仕うまつりたまふ(何事をも最上の生活様式で皇后に奉仕なさっています)。いかめしうなりたる\*御族なれば(御子息が皆要職に就いて、盛隆の大臣一家なので)、なかなか\*いにしへよりも(却って初代が藤原殿に圧され申

していた頃の事情よりも)、今めかしきことはまさりてさへなむありける(他家に比して圧倒的な優位でさえあったのです)。\*「さだいじんの」は注に<横山本や池田本は「右大殿」とある。『集成』は「右の大殿」と校訂。『完訳』は「左大臣殿」のまま、「右大臣」とあるべきか。夕霧。六条院の現在の主である」と注す。>とある。右や左に然程拘らないのは、女房の生活感なのだろうか。しかし、組織立てが二列運営となっていて、実際には右と左とは決定的に違う体制を擁するのであり、それを外形的に示すのが左右なのだから、いくら内部目線でもその区別はしっかりつけなければ説明にならない筈だが、現にゴチャゴチャだ。\*「むかし」は故光君。\*「御族(おおんぞう)」は源氏大臣家の一族で、子沢山でそれぞれが要職に就いていたので、子供が少なかった光君よりも栄えている、ということらしい。\*「いにしへ」は故光君の人柄というよりも、当時の事情を言っていて、その事情とは藤原殿の優位性なのだろう。

\*この宮(この六条院暮らしの三の宮は)、例の御心ならば(普段の御性分であれば)、月ごろのほどに(この数ヶ月の内に)、いかなる好きごとどもをし出でたまはまし(多くの女に手を出しなさっただろうが)、こよなく静まりたまひて(すっかり鎮まりなさって)、人目に(女房の目には)「すこし生ひ直りたまふかな(少し成長して真面目にお成りなさったのだろうか)」と見ゆるを(と見えていたが)、このころぞまた(最近になってまた)、宮の君に(この式部卿御女の宮の君に)、本性現はれて(本性を現して)、かかづらひありきたまひける(言い寄りなさっていたのです)。\*「この宮」は既に何度か使われている<匂う三の宮>をいう言い方らしいが、「この」は此処の舞台の<六条院(に住まうところ)の>という言い方なのだろう。こういう言い方は女房らしい即物的な視点だ。

#### [第四段 侍従、薫と匂宮を覗く]

\*涼しくなりぬとて(涼風も立ってきたので)、宮(後の宮は)、内裏に参らせたまひなむとすれば(御所にお帰りになる頃だが)、\*「涼しくなりぬとて」は注に<季節は初秋七月に推移。>とある。が、秋になっているのは、既に一段に「荻の葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみける」(和歌 52-06)とあった。下に「秋の盛り」ともあるので、むしろ仲秋八月に入ったのではないかと思う。

「秋の盛り、紅葉のころを見ざらむこそ(この秋の盛りの六条院の紅葉を見ないでは、帰れません)」

など、若き人びとは口惜しがりて(と若い女房たちは惜しんで)、皆参り集ひたるころなり(みな六条院に参集していました)。水に馴れ月をめでて(水辺に寄って月を愛でて)、御遊び絶えず(音曲が絶えず)、常よりも今めかしければ(普段よりも華やいで)、この宮ぞ(三の宮は)、かかる筋はいとこよなくもてはやしたまふ(こういう場では非常に持てはやされなさいます)。朝夕目馴れても(日頃宮を見慣れ申す女房たちの目にも)、なほ今見む初花のさましたまへるに(さらに今初めて見る花のように宮が華やいでいらっしやるのに比して)、大将の君は(大将の薫君は)、いとさしも入り立ちなどしたまはぬほどにて(三の宮ほどは女房たちの中に入っしやる事が普段は無かったので)、恥づかしう心ゆるびなきものに(こういう場で麗装なされると、気が引けて緊張させられるように)、皆思ひたり(皆思いました)。

例の(いつものように)、二所参りたまひて(この御二人が揃って)、御前におはするほどに(后宮の御前に参上していらっしゃる所を)、かの侍従は、ものより覗きたてまつるに(かの常陸姫の侍従が物陰から覗き申し上げると)、

「いづ方にもいづ方にもよりて(どちらの御方に寄り添ったとしても)、めでたき御宿世見えたるさまにて(恵まれた御運勢で)、世にぞおはせましかし(姫君は現世を生きていらっしゃれたものを)。あさましくはかなく(意外で呆気ない)、心憂かりける御心かな(残念なお考えだった)」

など(などとは)、人には(他の女房には)、そのわたりのこと(その辺の事情は)、かけて知り顔にも言はぬことなれば(一切知った顔で話したりはしなかったので)、心一つに飽かず胸いたく思ふ(侍従一人の胸中で深く辛く思います)。宮は、内裏の御物語など(三の宮が母君の後の宮に、御所の最近のご様子などを)、こまやかに聞こえさせたまへば(詳しくお話し申しなさっている)、いま一所は立ち出でたまふ(薫大将は席を外しなさいます)。「見つけられたてまつらじ(見付けられ申さずに居よう)。しばし(暫くは)、\*御果てをも過ぐさず心浅し(一周忌も待たずに出仕したとは薄情だ)、と見えたとまつらじ(と思われ申したくない)」と思へば、隠れぬ(と思うので、侍従は隠れました)。\*「おおんはてをもすぐさずころあさし」は注に<一周忌明けを待たず出仕したことをさす。>とある。

[第五段 薫、弁の御許らと和歌を詠み合う]

東の渡殿に(東の対に渡る廊下部屋の)、開きあひたる戸口に(開け放してある襖の引戸口に)、人びとあまたみて(女房たちが大勢居て)、物語などする所におはして(世間話などをしている所に薫大将はいらっしゃって)、

「なにがしをぞ(私の方こそを)、女房は睦ましと思すべき(あなたがた女房は親しい話し相手と思いなさるべきだ)。女だにかく心やすくはよもあらかし(女同士だからって油断は出来ませんよ)。さすがにさるべからむこと(それに意外な事を)、教へきこえぬべくもあり(私が教え聞かせるかもしれません)。やうやう見知りたまふべかめれば(だんだんお見知り下されば)、いとなむうれしき(嬉しいです)」

とのたまへば(と仰れば)、いといらへにくくのみ思ふ中に(気が引けてとても答えられないとばかり思う女房たちの中に)、弁の御許とて、馴れたる大人(弁の御許と言って場慣れた古女房が)、

「\*そも睦ましく思ひきこゆべきゆゑなき人の(そもそも親しく思い申せる間柄では無い人が)、恥ぢきこえはべらぬにや(他人だからこそ後腐れの気兼ね無く旅の恥を搔き捨てられるものなのでしょう、だから、あなた様を大将と知る此処の女房たちが気安くお話し申せるはずもございません)。ものはさこそはなかなかはべるめれ(近しいからこそ遠慮されると、物事はそんな風に皮肉なものですから)、かならずそのゆゑ尋ねて(人付き合いは、必ずしも相



手の身元が分かった上で)、うちとけ御覽ぜらるるにしもはべらねど(親しくお話しして頂けるといふものではございませんが)、かばかり\*面無くつくりそめてける身に負はさざらむも(あなた様をお見知り申すとは言え、このように凶々しいのが平気な私がお相手を引き受け申さずに御返事しないというの)、かたはらいたくてなむ(気取っているようで、気が引けますので)」 \*「そも睦ましく思ひきこゆべきゆゑなき人の～」の文意は非常に取り難い。が、大筋は<他人だから遠慮がない=あなたを知っているから遠慮されて誰も返事ができない>ということなのだろうと、大幅に補語した。 \*「面無し(おもなし)」は<恥ずかしい。面目ない。>と<厚かましい>との逆の語用があるらしい。で、「作り染む」は<し慣れる>だろうから、「面無くつくりそめてける」は<厚かましくしなれている→凶々しいのが平気だ>。

と聞こゆれば(とお応え申すと)、

「\*恥づべきゆゑあらじ(恥らう柄じゃない)、と思ひ定めたまひてけるこそ(とあなたがあなた自身を決めつけなさるのは)、口惜しけれ(もったいない)」 \*「恥づべきゆゑあらじ」は薫殿自身のことを女房たちが<恥ずかしがる理由は無い相手だ>と言っているのではなく、弁の御許が御許自分を「面無くつくりそめてける身」と言ったのを、薫殿は<今さら恥らう柄じゃ無い>という言い方に換えて、いやいや、しかしあなたはそんなに老けてない、と愛想を言ったのだろう。非常に分かり難い文だが、そういう文意と解するのが最も通りが良いように見える。

など、のたまひつつ見れば(と仰りながら薫殿が部屋の中を見ると)、唐衣は脱ぎすべし押しやり(御許は唐衣は脱ぎ滑らせて端に押し遣り)、うちとけて手習しけるなるべし(寛いで手習をしていたらしく)、硯の蓋に据ゑて(その習字の紙を硯の蓋に置いて)、心もとなき花の末手折りて(有り触れた野の草花の切花を)、弄びけり、と見ゆ(慰みものにしていて、ようです)。かたへは几帳のあるにすべり隠れ(そして他の女房たちは、ある者は几帳の陰に滑り隠れ)、あるはうち背き(またある者は背を向けて)、押し開けたる戸の方に(押し開けてある寝殿の妻戸の方に)、紛らはしつつゐたる(身を目立たせないようにしているのが)、頭つきどもも(それらの髪型も)、をかしと見わたしたまひて(花畑のように美しいと見回しなされて)、硯ひき寄せて(硯を引き寄せては)、

「女郎花乱るる野辺に混じるとも、露のあだ名を我にかけめや (和歌 52-07)

「露ほどの あだ名も掛けず 女郎花 (意識 52-07)

\*注に<薫の贈歌。「かけめや」反語表現。『河海抄』は「女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」(古今集秋上、二二九、小野美材)を指摘。>とある。小野美材(おののよしき、?-902 平安時代前期の官吏、漢詩人)は<小野篁(たかむら)の孫。寛平(かんぴょう)9年従五位下、大内記となる。書にすぐれ、醍醐(だいが)天皇の大嘗会(だいじょうえ)に際し屏風(びょうぶ)歌をかいた。漢詩は「本朝文粹(もんずい)」に、和歌は「古今和歌集」などにおさめられている。延喜(えんぎ)2年死去。通称は野美材。>とコトバンクの日本人名大辞典にある。

心やすくは思さで(誰も私に気を許さないのぞ)」

と(と書いて)、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば(すぐ近くの襖戸に背中を見せている女房にお見せになると)、うちみじろきなどもせず(その女房は慌てることも無く)、のどやかに(落ち着いて)、いととく(即座に)、

「花といへば名こそあだなれ女郎花、なべての露に乱れやはする」(和歌 52-08)

「名前ほど 露に乱れぬ 女郎花」(意訳 52-08)

\*注に<中将の御許の返歌。『古今集』歌「女郎花多かる野辺に」歌を踏まえる。>とある。この女房が<中将の御許>だということは後で知れるのだから。

と書きたる手(と返歌を書いた筆跡は)、ただ\*かたそばなれど(たったの三十二文字だったが)、よしづきて(教養が窺えて)、おほかためやすければ(全体に好感されたので)、誰ならむ、と見たまふ(誰だろうと薫殿はお思いになります)。今参う上りける道に(この女房は、今から后宮の御部屋に参上するところを)、塞げられてとどこほりゐたるなるべし(薫大将に道を塞がれて此処で座っていたようだ)、と見ゆ(と見えます)。 \*「かたそば」は<片端。一端。一部分。>と古語辞典にある。

弁の御許は(べんのおもとは)、

「いとけざやかなる\*翁言(そんなきっぱりと枯花のような言い方をするのは)、憎くはべり(愛想がありません)」とて(と言って)、 \*「翁言(おきなごと)」は注に<弁御許の詞。『完訳』は「薫の歌を、女に囲まれても浮気心を持たぬ老人言葉と戯れた」と注す。>とある。が、「憎くはべり」はその「翁言」を「憎し」と評した言い方であって、そこに敬語遣いが無いのは貴人に対する言葉遣いではないように聞こえる。仮に、是が弁御許自身の印象を言うのなら<憎く思い侍り>だろうが、それでもその「翁言」に敬意を示すなら<憎く思い奉り侍り>かもしれないし、そも「翁言」に「御」が付かない事だけでも、この「翁言」が薫殿の歌詠みを言っているとは甚だ疑わしい。薫殿は歌を書いて近くの女房に見せた。しかし、此処は多くの女房が居る場であり、それを前提に大将は歌詠みしたのだから、女房は皆に知らせるべくその歌を読み上げただろう。そして直ぐに返歌を書いて大将に見せた。大将は読み上げただろう。此処は二人きりの場ではない。多くの人が共有している遊びの時空だ。古女房が若女房に、今から自分が返歌の見本を見せるから勉強しなさい、とたしなめたと見る方が場面展開が楽しい。大将が感心したのも女房の手筋であって、歌詠みではなかった。それに、薫殿は「我にかけめや」と誘っているのであって、決して枯れていない。が、女房の歌は「乱れやはする」と拒んでいて、此方は枯れている。

「旅寝してなほこころみよ、女郎花盛りの色に移り移らず」(和歌 52-09)

「色移り するかどうかを 女郎花」(意訳 52-09)

\*注に<弁御許の贈歌。薫を挑発する歌。>とある。女郎花は「をみなへし」だから、「を」を<其を>の「を」、「み」を<こころみ>の「み」、「な」は動作の完了や強調を示す助動詞「ぬ」の未然形、「へ」は動作の反復や継続を示す助動詞「ふ」の已然形ないし命令形、「し」は動作や事態認識を強調する副助詞、だと見做して、「なほこころみよ、をみなへし」で<ぜひ試して見てください、ぜひそうして御覧なさいまし>と言っているように聞こえないこともない、ように私は思う。それに、それくらいの洒落が利いて居ないと、とてもお手本にはならないんじゃないのか。

さて後、定めきこえさせむ(そうすれば、はっきりし申すでしょう)」

と言へば(と色っぽく返歌し直すと)、

「宿貸さば一夜は寝なむ、おほかたの花に移らぬ心なりとも」(和歌 52-10)

「をみなへし をみなへしとも をみなへし」(意識 52-10)

\*注に<薫の弁御許の挑発に応えた歌。>とある。冗談に冗談で応えた、ということではあろうが、「やどかさばひとよはねなむ」の下敷きは無いのだろうか。何か下敷きの風情を利用しているような気がするが、何も無いなら「おほかたの花に移らぬ心なりとも」が<おまえたち相手ではその気になれないと思うが>と、ずいぶん高飛車な言い方になるが、冗談ならそういう悪態も楽しいのかも。意識も冗談気分に乗じた。即ち、「をみなへし」の「み」は「見る」がマ行上一段活用なので未然形とも連用形とも取れる。そして「な」は、打消の助動詞「ぬ」の未然形とも、完了の助動詞「ぬ」の未然形とも取れる。だから「をみなへし」は<女郎花>であり<会ってみる>でもあり<そうじゃないかも=気に入らないかもしれない>でもある。

とあれば(と大将が返したので)、

「何か(何もそう)、恥づかしめさせたまふ(はっきり駄花と申しなさいますな)。おほかたの野辺のさかしらをこそ\*聞こえさすれ(ただの野辺の花なりのお愛想を申し上げただけですのに)」 \*「聞こえさすれ」は「聞こえさす(聞こえるようにさせる→申し上げる)」の已然形で、下に「ば」が付いて、逆接で「何か」に倒置する、という構文なのだろう。

と言ふ(と弁御許は言います)。はかなきことをただすこしのたまふも(こんな冗談を大将が少しだけ仰っても)、人は残り聞かまほしくのみ思ひきこえたり(女房たちはもっと聞きたいとばかり思い申しました)。

「心なし(是は気が利かなかった、私が行く手を遮っていたようだ)。道開けはべりなむよ(今退いて、道を開けますよ)。分きても(私に「乱れやはする」と連れなく返歌なされたあなたは、特に)、\*かの御もの恥ぢのゆゑ(そのように畏まりなされる理由が)、かならずありぬべき折にぞあめ(きっとありそうな人のところへ参りなされる途中だったのでしょう)」 \*「かの御もの恥ぢのゆゑ」は注に<誰か他に男性がいて物陰に隠れているのだろうという。暗に匂宮の存在をいう。>とある。「暗に匂宮の存在をいう」という文意解釈には従う。匂宮は中宮の御部屋に居るはずだろうから。し

かし、「もの恥ぢ」は<物陰に隠れる>のではなく<恥掻きを恐れて>畏まる>ことなのではないか。近くの襖に居た女房は堅苦しい返歌をしていた。それと、固辞は決まり文句なので、苦も無く緊張もせずに即答できた、ということかもしれない。

とて、立ち出でたまへば(と言って薫大将が立ち去りなされると)、「\*おしなべてかく残りなからむ(私たちが皆この弁御許のように底が浅い)、と思ひやりたまふこそ心憂けれ(と大将が見做し為さるのは不本意だ)」と思へる人もあり(と思う女房も居ました)。\*「おしなべてかく～」は注に<以下「心憂けれ」まで、ある女房の思い。自分たちまでが弁御許のようにあけすけに物を言う女房だと薫から思われてしまうのはいやだ、の意。>とある。「残り無し」は<明け透けだ。奥ゆかしさが無い。下品だ。>みたいなことだろうか。

### [第六段 薫、断腸の秋の思い]

\*東の高欄に押しかかりて(薫大将は寝殿の東面の高欄に寄り掛かって)、\*夕影になるままに(夕日に照らされるほどに)、\*花の紐解く御前の草むらを見わたしたまふ(花が開いてくる前庭の夕顔の蔓が延びた草むらを見渡しなさいます)。\*「ひんがしのかうらん」は注に<寝殿の東の簀子にある高欄。>とある。\*「ゆふかげ」は<夕日の光>または<夕日に照らされて映える物の形>と古語辞典にあり、此处では「になる」と受身表現なので、照らされている物が目的語だ。\*「花の紐解く」は<花が咲く>だから、夕方に開花する花のことであり、それは恐らく夕顔なのだろう。夕顔は棚栽培をしなければ蔓は地を這う。

\*もののみあはれなるに(何とも実にしみじみした情緒で)、「\*中に就いて腸断ゆるは秋の天(中でも故人が悼まれる秋の空だ)」といふことを(という白居易の詩文を)、いと忍びやかに誦じつつあたまへり(ごく低く独りで口ずさんでいらっしやいました)。\*「もののみ」の「のみ」は限定意ではなく<それこそ実に>という強調の副助詞で、「もののみあはれ」は「ものあはれ(何ともしみじみした情緒)」を<実に>と強調した言い方らしい。\*「なかについて、はらわたたゆるは、あきのてん」は注に<「大抵四時は心惚べて苦なり中に就いて腸の断ゆるは是れ秋の天」(白氏文集、暮立)。『和漢朗詠集』秋にも所収の詩句。>とある。「白氏文集、暮立」をウェブ検索すると、いくつかのブログサイトにこの詩は白居易が40歳の時に母を亡くして、その喪中に詠まれた物との説明があった。七語づつの四行詩で韻踏みに決まりがあり、起承転結の構成になっている漢詩を七言絶句というらしく、この詩も七言絶句とのこと。即ち、「黄昏独立仏堂前、満地槐花満樹蟬、大抵四時心総苦、就中腸断是秋天。」とあり、この「就中腸断是秋天」の意味は、四季折々とある中で秋の季節が情趣深い、ということではなく、喪中はいつも悲しいが中でも秋の情趣が故人を痛む悲しさを極まらせる、ということらしい。だから、この詩文の此处での引用は、薫殿は人知れず常陸姫を悼んでいた、という文意になるようだ。ところで話は逸れるが、それにしても最近ではブログ形式のサイトが多い。ブログはウェブ・ログ(電子通信網上で公開日誌)という趣きらしく、公開されてはいても、その書式を共有する限られた同志の連絡網の色合いが濃く、それはそれで意見交換の場としては有用だろうが、部外者と言うか本当に通りすがりの者に対して、独立した店構えを示していないので私は出来れば敬遠したい。一方で独立した、とは言え勿論それは慣習的に一般化した定形の形式・書式で示されているが、その形式体裁が不特定多数に向けて論旨単体の表示となっている分かりやすいウェブサイトとして看板を立てて情報発

信して、他方で別にログサイトを持つのは便利な通信網の活用法なのかも知れないが、私には相互連絡の確認作業を相手の主体性に任せた高圧的で無責任で不気味な依存体質に見える。私的な交信は非公開でなければ、語意に客観性が付いて回って真意が伝わらない。公開の場では客観的な語意を前提とするので、其処で初めて参加者同士で同じ論理構築が可能になるのであって、その場に参加するかどうかの選択が可能な第三者が編集権を持って管理する場に、その編集意図に同意して参画出演するという形以外に衆人の鑑賞に堪える見世物が演出できるとは思えない。

\*ありつる衣の音なひ(先ほど歌を詠み交わした若女房が歩き進む衣擦れの音が)、しるきけはひして(はっきり聞こえて)、母屋の御障子より通りて(母屋の襖戸を通過)、あなたに入る\*なり(后宫の御部屋に入った様子です)。\*「ありつるきぬのおとなひ」は注に<薫に道を塞がれ和歌を詠み交わした中将君が中宮のもとに参上。>とある。\*「なり」は「鳴り」の語感。注には<「なり」伝聞推定の助動詞。薫が衣擦れの音で推測している叙述。>とある。

宮の歩みおはして(入れ違いに、匂宮が御部屋から出ていらっしゃって)、

「これよりあなたに参りつるは誰そ(今、入って行ったのは誰か)」

と問ひたまへば(と近くの女房にお尋ねなされると)、

「\*かの御方の中将の君(后宫の女房の中将の君です)」 \*「かのおおんかた」は注に<女房の答え。中宮づきの女房、中将君だと言う。>とある。寝殿の東側を皇后の御座所に行っているようなので、東の対は皇后付きの女房たちの曹司・局に当てられていたのだろう。

と聞こゆなり(と応え申していました)。

「\*なほ、あやしのわざや(また、軽々しい)。誰れにかと(あの女は誰だろうか)、かりそめにもうち思ふ人に(ちょっと言い寄ってみようかと興味を持った男に)、やがてかくゆかしげなく聞こゆる名ざしよ(そのままあのようにはっきりと申し上げる名指しとは)」と、いとほしく(と味気なく)、この宮には(三の宮には)、皆目馴れてのみおぼえたてまつるべかめるも口惜し(六条院の女房たちが皆普通に慣れ親しみ申し上げているらしいのも薫殿には面白くありません)。\*「なほ、あやしのわざや」は注に<以下「聞こゆる名ざしよ」まで、薫の感想。『完訳』は「浮気な男に問われるままに、安易に名を告げる女房の軽率さを非難」と注す。>とある。

「おりたちてあながちなる御もてなしに(立ち入って強引に口説く宮のなさり方に)、女はさもこそ負けたてまつらめ(女はあんなふうに従い申すのだろう)。わが(私が困った常陸姫も)、さも口惜しう(何とも残念なことになって)、この\*御ゆかりには(この御甥については)、ねたく心憂くのみあるかな(小癩で邪魔なだけだ)。いかで、このわたりにも(何とかこの六条院社中にも)、めづらしからむ人の(目を引きそうな美人で)、例の心入れて騒ぎたまはむを語らひ取りて(例によって匂宮が気に入って持てはやしていそうな女房を横取りして)、わが思ひしやうに(私が味わったような)、やすからずとだにも思はせたてまつらむ(苦い思い

だけでも知らせ申したい)。まことに心ばせあらむ人は(本当に情愛の分かる女なら)、わが方にぞ寄るべきや(私の方に寄り付きそうなものだが)。されど難いものかな。人の心は(しかし難しいものだ、人の気持ちは)」 \*「おおんゆかり」は注に<匂宮とその同母の女一宮をさす。>とある。「ゆかり」は<血縁関係>および<血縁者>で、此处では<匂宮>だけを指して<甥>と言っているように私には思える。

と思ふにつけて(と薫殿は思う一方で)、対の御方の(匂宮夫人である二条院の対の御方が)、\*かの御ありさまをば(宮の女関係のお振る舞いを)、ふさはしからぬものに思ひきこえて(分不相応な不穏当なものに思い申して)、いと便なき睦びになりゆくが(私を頼って度を過ぎて親しくなるのを)、おほかたのおぼえをば、苦しと思ひながら(世間体からして不都合に思いながら)、なほさし放ちがたきものに思し知りたるぞ(それでも突き放し難くお思いなのを)、ありがたくあはれなりける(嬉しく感じ入ります)。 \*「かのおおんありさま」は注に<匂宮の好色な振る舞い。>とある。此处での「かの」の指示代名詞は紛らわしい。宮の、または、匂宮の、と明示してほしいところだ。

「さやうなる心ばせある人(そのように私の誠実さを分かる女房が)、ここらの中にあらむや(此处の中にいるだろうか)。入りたちて深く見ねば知らぬぞかし(特にはよく見入っていないので知らないが)。寝覚がちにつれづれなるを(このところ、姫を失った空虚感から寝覚めがちで夜が寂しいので)、すこしは好きもならばばや(少し此处の女房と好色事を習いにしてみようか)」

など思ふに(などを思うが)、今はなほつきなし(今はやはり気が進みません)。

#### [第七段 薫と中将の御許、遊仙窟の問答]

例の(それでも例によって小宰相君の部屋がある)、西の渡殿を(西の対へ続く渡り廊下を)、ありしにならひて(先日の御八講最終日に姫宮を垣間見た時に倣って)、わざとおはしたるもあやし(敢えて訪ねなされたというのも、どういう気まぐれなのでしょう)。\*姫宮、夜はあなたに渡らせたまひければ(姫宮は夜は母宮とお寝みになるので東母屋に移りなされたので)、人びと月見るとて(女房たちは月見をしよう)、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり(この渡り廊下で和やかに談笑している時でした)。箏の琴いとなつかしう弾きすさむ爪音、をかしう聞こゆ(廊下には誰かの局で箏の琴をととても手慣れて弾き流す爪音が、風情良く聞こえています)。思ひかけぬに寄りおはして(その局に薫大将が不意に近付きなされた)、 \*「姫宮、夜はあなたに渡らせたまひければ」は注に<女一宮は夜は中宮方でお寝みになる。>とある。

「\*など、かくねたまし顔にかき鳴らしたまふ(あなたは何で『遊仙窟』の十娘(じゅうじょう)のように、そんなに思い入れ深そうにお弾きになるのですか)」 \*注に<薫の詞。『源氏積』は「故故將織手 時時小絃 耳聞猶氣絶 眼見若為怜」(遊仙窟)を指摘。女房の弾く箏琴のさまを遊仙窟の十娘が琴を弾くさまに比して言う。>とある。「遊仙窟(ゆうせんくつ)」は<中国唐代の小説。張鷟(ちようさく、字(あざな)は文成)著。主人公の張生が旅行中に神仙窟に迷い込み、仙女の崔十娘(さいじゅうじょ

う)と王五嫂(おうごそう)の歓待を受け、歓楽の一夜を過ごすという筋。四六文の美文でつづられている。中国では早く散逸したが、日本には奈良時代に伝来して、万葉集ほか江戸時代の洒落本などにも影響を与えた。古写本に付された傍訓は国語資料として貴重。遊僊窟。>と大辞泉にある。どうやら、此处でしばらくこの中国小説を下敷きにした女房との会話が展開される、という場面らしい。それも、漢文本文(の訓読)に基づいた言い回しの応酬であるらしい。が、今、それらの語意を丹念に調べるのは私には荷が重すぎる。で、物語のあらすじを知るべくウェブ検索すると、ジオシティーズの「中国を楽しく旅行する」サイトの「中国語学習ノート」コーナーの「youxianku」ページに解説があった。で、大粗だが<十娘は17才、五嫂は19才、二人とも未亡人で、夫の死後、操を立て、ずっと男を断っていた。>とあり、この「など、かくねたまし顔にかき鳴らしたまふ」は十娘が故兄を偲んで琴を弾いていた、という場面かと推測される。なお、参照ページによれば、この小説の真骨頂は文成が十娘と情交する場面の性愛描写が<現代の官能小説さながらに、展開される。>ところにあるらしく、具体的な説明もあって興味深いが、その考察はまた別の機会を待ちたい。

とのたまふに(と仰ったので)、皆おどろかるべけれど(近くに居た女房たちは皆驚いたようだったが)、すこし上げたる簾うち下ろしなどもせず(琴を弾いていた局の女房は、少し巻き上げてあった簾を男の目を憚って下ろすということもなく)、起き上がりて(姿勢を起こして)、

「\*似るべき兄やは、はべるべき(『遊仙窟』で亡くなったという崔季珪(さいきけい)に似ている兄など、私にはいません)」 \*注に<中将御許の詞。『遊仙窟』の「気調如兄 崔季珪之小妹」を踏まえた表現。>とある。中将の御許は、先ほど薫殿が東の渡殿で偶々歌を詠み交わした女房で、その女房は匂宮と入れ替わりに后宫のお部屋に入って行ったはずで、その時に匂宮が他の女房にその女の名前を訊いて、女房がその女を「かの御方の中将の君」(六段)と答えていて、その様子が高欄のところから見ていた薫殿も、その女房の名前を「中将御許」と知った、ということだった、ように思う。ところで、私は中将御許を東の渡殿に居たので、てっきり后宫付きの女房だろうと思っていたが、この西の渡殿に局があるのなら、姫宮付きの女房ということになりそうだ。であるなら、小宰相君の同僚ではないか。むしろ、東の渡殿にいる后宫の女房に何かの用があって、さっきは偶々東に居たということだろうか。一応、そう思って置く。

といらふる声(と応える声は)、中将の御許とか言ひつるなりけり(中将の御許とかいっていた女房なのでした)。

「\*まろこそ、御母方の叔父なれ(私は姫宮の兄というべき、御母方の叔父なんですよ)」 \*注に<薫の詞。『遊仙窟』の「容貌似舅 潘安仁之外甥」を踏まえた表現。暗に自分は女一宮の叔父だ、話題を女一宮に転移。>とある。この辺の展開は小説に準えてあるのだから、「遊仙窟」を知らないとな面白さは分からないようだ。実際、私には是がどんなに気の利いた言い回しなのか分からない。

と、はかなきことをのたまひて(と、軽口を仰って)、

「例の(いつものように姫宮は)、あなたにおはしますべかめりな(彼方にいらっしゃったようですね)。何わざをか、この\*御里住みのほどにせさせたまふ(姫宮はどんな風に、后宫が御里帰りなさっている時に暮らしていらっしゃいますか)」 \*「おおんさとずみ」は注に<六

条院での生活。>とある。ただ、この「御」は姫宮ではなく、后宫に対する敬語だろう。姫宮はずっと六条院暮らしなのだから。

など、\*あぢきなく問ひたまふ(と何気なさそうにお訊きになります)。 \*「あぢきなし」は<特にどうと言うこともない→何気なしに>だが、薫殿は実は姫君に関心があるので、本当に<何気なく>訊いたのではなく、上手く<それとなく←何気なさそうに>訊いた、のだろう。

「\*いづくにても、何事をかは(どちらのお部屋でも、特に違いはないでしょう)。ただ、かやうにてこそは過ぐさせたまふめれ(同じように、あのようにゆっくりお寝みになっていらっしゃるようです)」 \*「いづく」とは、御所と六条院の違いだろうか。でも、それは后宫の暮らしぶりの違いであって、姫宮にとっての「いづく」は自分の部屋で寝ることと母宮の部屋で寝ることとの違い、ということになるのだろう。

と言ふに(と御許が言うと)、「をかしの御身のほどや(美しい寝姿なんだろうな)」と思ふに(と薫殿は思って)、すずろなる嘆きの(思わずため息を)、うち忘れてしつるも(迂闊にしてしまったのを)、「あやしと思ひ寄る人もこそ(変に勘ぐる女房もいるかもしれない)」と紛らはしに(と姫宮への恋情を誤魔化すために)、さし出でたる和琴を(近くに出ていた和琴を)、たださながら搔き鳴らしたまふ(その調弦のまま搔き鳴らしなさいます)。\*律の調べは、あやしく折にあふと聞く声なれば(律の調べは不思議と秋の情緒に合う調子なので)、聞きにくくもあらねど(耳障りではなかったのに)、弾き果てたまはぬを(一曲を最後までお弾きにならなかったのを)、なかなかかなりと(残念だと)、心入れたる人は(音楽好きの女房は)、\*消えかへり思ふ(がっかりします)。 \*「りちのしらべ」はざっと短調っぽいらしく、長調っぽい呂調とははっきり趣きが違うらしい。 \*「消え返る」は<意気消沈する>だろうか。

「わが母宮も劣りたまふべき人かは(私の母の入道宮も姫宮に劣りなさらない内親王でいらっしゃる)。后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ(姫宮は后腹で、わが母宮は女御腹と申す違いこそあれ)、帝々の思しかしづきたるさま(それぞれの父帝が大事にお育てなされたことに)、異事ならざりけるを(違いはないものを)。なほ(それでもなお)、この御あたりは(この姫宮は)、いとことなりけるこそあやしけれ(格別なのは不思議だ)。\*明石の浦は心にくかりける所かな(明石の海辺はよほど見所のあるところらしい)」など思ひ続ける\*ことどもに(などと血縁の由緒や正統性を考え進めて行けば)、「わが宿世は、いとやむごとなしかし(私の生まれは、本当に高貴な血筋と言えるのかもしれない)。まして(女二の宮を正室に迎えた上に)、並べて持ちたてまつらば(女一の宮まで両方を妻に持ち申し上げることができたら、そんな栄達は他に例がないだろう)」\*と思ふぞ、いと難きや(と薫殿はそれもまるで無理な話でもないと思うのです)。 \*「明石の浦は心にくかりける所かな」は作者が薫殿をして意味ありげに思わせぶりたっぷりの台詞を言わせている感が強いが、また確かに、薫殿は表向きでも実質でも明石一族とは縁遠いが、かといって、薫殿がどこまで、またどのように明石一族を認識していたのかはまったく不明だ。それでも、自分の出生に引け目を負っている薫殿だが、姉の明石中宮にしても実は受領の家柄で何も由緒ある高家の出でもない、と見据えているような言い方には聞こえる。が、そんなことは今初めて気づいたことの筈は無



く、此処で無闇に薫殿の心中を推測するには、あまりにも唐突な「明石」の持ち出し方で、ちょっと補語しづらい。\*「ことども」は文脈からして、どうやら血筋の由緒を見直しているように見える。血筋についての薫殿の屈折した思いは、この続編物語に於いて結構重要な要素だ。\*「と思ふぞ、いと難きや」の目的語を明示して修辞を導く係助詞「ぞ」+形容詞の連体形+打ち消しの係助詞「や」の定形化した倒置文型は、通常文型ならくと、いと難くもなきものに思ふ>くらいになるのだろう。

#### [第八段 薫、宮の君を訪ねる]

\*宮の君は(故式部卿宮女である宮の君は)、この西の対にぞ御方したりける(この西の対にお部屋を持っていました)。若き人びとのけはひあまたして(部屋付きの若女房が大勢居る気配で)、月めであへり(月を愛で合っていました)。\*「宮の君」は注に<蜻蛉式部卿宮の女王。女一宮のもとに出仕。>とある。

「いで、あはれ(ああ、そうだった)、\*これもまた同じ人ぞかし(この人もまた姫宮と同じ皇女の血筋の人ではないか)」\*「これもまたおなじ」は注に<薫の心中の思い。宮の御方も皇族の女王で、父親王にかわいがられていた方だ、の意。>とある。この文意は文脈からして取り易い。

と思ひ出できこえて(と薫殿は宮の君の出自を思い出し申して)、「親王の(父親王の故式部卿宮が)、昔心寄せたまひしものを(以前に私を婿にとお考えの人だった)」と\*言ひなして(ということで縁があると)、そなたへおはしぬ(そちらの部屋に向かいなさいます)。童の(部屋の前では童女が)、をかしき宿直姿にて(可愛らしい寝間着姿で)、二、三人出でて歩きなどしけり(二、三人出て歩き回っていました)。見つけて入るさまども、かかやかし(大将殿が来るのを見つけて部屋に入る様子も賑やかです)。これぞ世の常と思ふ(薫殿は是をごく普通の日常の光景と思います)。\*「言ひなす」は<それらしく言う→そういう理屈で事情説明をする>。此処では、自分なりに正当化するみたいなことだろう。

\*南面の隅の間に寄りて、うち声づくりたまへば、すこしおとなびたる人出で来たり(薫殿が南表の隅の間に近付いて咳払いなされると、部屋の中から少し年配の女房が出て来ました)。\*「みなみおもてのすみのみ」は西の対の南廂の東角が宮の君の部屋なのだろうか。

「人知れぬ心寄せなど聞こえさせはべれば(人知れずお慕い申しておりますが)、なかなか(このようにお訪ね申しては、却って)、皆人聞こえさせふるしつらむことを(懸想する男の誰もが言い古して来たことを)、うひうひしきさまにて(物慣れない若造のように)、まねぶやうになりはべり(真似て言うようなことになっております)。まめやかになむ(ですから実際に)、\*言より外を\*求められはべる(言葉以外でお役に立ちたいと存じます)」\*「ことよりほか」は注に<『異本紫明抄』は「思ふてふことよりほかにまたもがな君一人をばわきて忍ばむ」(古今六帖五、わきて思ふ)を指摘。>とある。この引歌はウェブ検索しても解説ページがヒットせず、今のところ言葉面から雑観して推論するしかなさそう。と言っても、さっぱり訳が分からない。多分、何かの事物に掛けた歌詠みなのだろう。ともあれ、歌筋は<思っているという言葉以上に君だけが特に恋しい>だろうが、「思ふてふこと」と「また」に具体意がないと「もがな」の願望想定に面白味が出て来ない。ただ、此処で薫殿が

言う「まめやかになむ」が、当時は広く知られていたらしい其の「また」に掛けた言い方になっていそうな気はする。でないと、洒落た言い方にならないから。 \*「求められはべる」は<求められたく思ひ侍る>の親しみある短縮形と見て置く。

とのたまへば(と薫殿が仰ると)、君にも言ひ伝へず(その女房は部屋へ戻って宮の君に薫殿の来訪を言い伝えることもせずに)、さかしだちて(でしゃばって)、

「いと思ほしかけざりし御ありさまにつけても(本当に思いも掛けなかった姫君が宮仕え申しなさることになるなどという御経緯についても)、故宮の思ひきこえさせたまへりしことなど(故父宮がどんなに姫君を大事にお思い申しなさっていたことかと)、思ひたまへ出でられてなむ(悲しく思い出されます)。\*かくのみ(まさにこうして)、折々聞こえさせたまふなり\*御後言をも(あなた様が折りに触れてお申し出くださるような御後見の御世話こそが有難いと)、よろこびきこえたまふめる(姫君は喜び申しなさるでしょう)」 \*「かくのみ」の「かく」は<この薫殿の訪問>だろうが、「のみ」は<今回だけ>とか<薫殿だけ>とかいう限定意ではなく、主題を<正にそれこそ>と強調する副詞語用らしい。 \*「おおんしりうごと」の語用には混乱する。というのは、「しりうごと」は<陰口。悪口。>と古語辞典にあり、そういう嫌味な語意を、いくら「御」と敬語遣いをして、本人に向かっては冗談でない限りは言わないし、まして貴人には絶対に言えないだろう。だから、「しりうごと」が誤記ではないかと写本画像サイトを雑観したが、どうやら<志りうごと>とあるようだ。となると、「しりうごと」には<後言>の他に<後見事=お世話焼き>の語用がある、と考えざるを得ない。また、「をも」は複数の事例を比較検討する際に劣位の者までも許容するという基準の拡張や拡大解釈を示す語用が現代語では主流だが、此处では目的語を示す格助詞の「を」を「も」の係助詞が副助詞「のみ」を受ける形で<尊いから>という価値観を添えて強調している、と読んで置く。

と言ふ(と言います)。

#### [第九段 薫、宇治の三姉妹の運命を思う]

「なみなみの人めきて(並の身分の者への応対のようで)、心地なのさまや(気の利かないことだ)」 とももの憂ければ(と薫大将は宮の君へ取り次がない女房の口上に嫌気して)、

「もとより思し捨つまじき筋よりも(もともと見捨てられない同じ王族血筋であることからしても)、今はまして(今はその上に)、\*さるべきことにつけても(このように近しくお会いできる間柄になった縁からしても)、思ほし尋ねむなむうれしかるべき(お頼り下さるのは嬉しいのですが)、疎々しう人伝てなどにてもてなさせたまはば(このように余所余所しく人伝で応対なさるなら)、\*えこそ(とても近いとは言えないのかもしれませんが)」 \*「さるべきこと」は<宿縁によって出会うと定められた間柄→特別な縁がある>という定型句みたいに何度も使われている。 \*「えこそ」は注に<下に「尋ねきこえざれ」などの語句が省略。『集成』は「とても(お話しできません)」。『完訳』は「とてもお伺いしかねます」と訳す。>とある。ただ、「さるべきこと」を受ける構文なので、下の省語は<さるべからざれ>かもしれない。

とのたまふに(と仰ったので)、「げに(御尤も)」と、思ひ騒ぎて(と古女房は気付いて慌てて部屋に入り)、君を\*ひきゆるがすめれば(宮の君に應對申しなさるる様に促したようで)、\*「ひきゆるがす」の「ひく」は<引っ張る→促す>、「ゆる」は<緩くする→許容する→應對に応じる>、「がす」は<そのように仕向ける>という接尾語で、つまり<應對するように促す>。

「\*松も昔のとのみ(昔の知り合いを待っても誰も来ないと)、眺めらるるにも(寂しく暮らす身にも)、もとよりなどのたまふ筋は(もともと同族だと仰る縁は)、まめやかに頼もしくこそは(本当に頼もしく思われます)」 \*「松も昔の」は注に<以下「頼もしくこそは」まで、宮の御方の詞。『源氏積』は「誰れをかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」(古今集雑上、九〇九、藤原興風)を指摘。>とある。播磨の高砂浜の防風林の松が丈夫で長寿と有名だったので、古い友人に準えようとしても、その友人も死んで、待つ身の私には誰も訪ねて来ない、みたいな老いの寂しさを洒落詠みした歌らしい。

と、人伝てともなく言ひなしたまへる声(と人伝ではなしに答えなさる宮の君の声は)、いと若やかに愛敬づき(とても若々しく可愛げがあって)、やさしきところ添ひたり(柔らかい感じがそなわっていました)。「ただなべてのかかる住処の人と思はば(ただ普通に此処に住処とする女房の一人と思えば)、いとをかしかるべきを(それはそれで、とても感じが良さそうだが)、ただ今は(皇女が今となっては)、いかでかばかりも(こうも簡単に)、人に声聞かすべきものとならひたまひけむ(人に声を聞かせて良い暮らしぶりに慣れていらっしゃる)」と、なまうしろめたし(と薫殿は反面で残念です)。

容貌もいとなまめかしからむかし(顔立ちもさぞ美しいんだろなあ)」と、見まほしきけはひのしたるを(と見てみたい気はしたが)、「この人ぞ、また例の、\*かの御心乱るべき\*つまなめると(この人はまた例によって、三の宮の好色心を乱す種になりそうだと)、\*をかしうも(面白いが)、ありがたの世や(私には得られない縁遠さらしい)」と思ひみたまへり(と薫殿は思っていたらっしゃいました)。 \*「かのみこころ」は注に<匂宮の好色心。>とある。 \*「つま」は<妻>ではなく<端緒、きっかけ>のことらしい。 \*「をかしうも」の「も」は逆接の接続助詞。

「これこそは(この人こそは)、限りなき人のかしづき生ほしたてたまへる姫君(最上の身分の故式部卿宮が大切に育て上げなされた姫君だ)。また、かばかりぞ多くはあるべき(他にこれほどの貴女が多く居るだろうか)。あやしかりけることは(不思議な事は)、さる聖の御あたりに(あの聖人然と質素な暮らしぶりだった故八宮の)、山のふところより出で来たる人びとの(山荘で育った娘たちに)、かたほなるはなかりけるこそ(見苦しい者の居なかったことだ)。この(最近亡くなった)、はかなしや(あっけない)、軽々しや(早計だ)、など\*思ひなす人も(と思える常陸姫も)、かやうのうち見るけしきは(見かけの姿は)、いみじうこそをかしかりしか(非常に風情があったものだ)」 \*「おもひなすひと」は注に<浮舟をさす。>とある。

と、何事につけても(と薫殿は何事につけても)、ただ\*かの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける(とにかく宇治八宮に血縁する娘たちを思い出していました)。あやしう(不思議で)、つらかりける契りどもを(実らなかったそれぞれの縁を)、つくづくと思ひ続け眺め

たまふ夕暮(深く感じて思い続けては遠く庭を見つめなさる夕暮れに)、\*蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを(トンボがものはかなげに飛び交うのを見て)、 \*「かの一つゆかり」は注に<宇治八宮の一族。>とある。 \*「かげろふ」はざっと<トンボ>のことらしい。また、当然に「かげろふ」は<影がゆらめく>という動詞であり、陽気の<陽炎>でもある。

「ありと見て手にはとられず、見ればまた行方も知らず消えし蜻蛉 (和歌 52-11)

「今ここに 見ればかげろう もういない (意識 52-11)

\*注に<薫の独詠歌。『花鳥余情』は「あはれとも憂しとも言はじかげろふのあるかなきかに消ぬる世なれば」(後撰集雑二、一一九一、読人しらず)「ありと見て頼むぞ難きかげろふのいつともしらぬ身とは知る知る」(古今六帖六、かげろふ)を指摘。>とある。

あるか、なきかの(夢かうつつの頼りなさ)」

と、例の、独りごちたまふ(といつものように独り言しなさる)、とかや(ようです)。

(2014年1月28日、読了)